
その二人、危険につき

autumn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その二人、危険につき

【NZコード】

N1518V

【作者名】

autumn

【あらすじ】

大学生の如月秋人が久々に実家に帰郷すると、そこで待っていたのはなんと猫又の小春だった。「おぬしは、世界に踏み込む意思があるかえ?」小春の依頼とその対価。世界の裏側と自身の秘密。非日常に足を踏み入れるとき、なぜか秋人と小春の同棲生活が始まる。

1 邂逅

『人生とはな、自分で考へてる以上に突然で理不尽なもんじゃぞ』色々な意味で尊敬する今は亡き祖父の言葉の一つを、如月秋人は反芻していた。

なるほど、確かに世の中には計り知れないことが多い。だからこそ常に心の準備をしておくのは大切なことだ。そのとおりだと思う。

が、しかし。実家の玄関に佇むこの存在を見て考へる。

「どうしたのじゃ？ 入つてこないのかや？」

……猫に話しかけられる事態を想定したことは、果たしてあつただろうかと。

秋人は混乱する頭で、ことの経緯を思い返した。

大学生の夏休み、大した予定もなくどうしたものかと考えていた秋人に叔父から久々に電話があつたのは、つい先日のことだ。

内容は、旅行で夫婦とも長期不在にするため実家の留守番をしてほしいという依頼だつた。

仕事は別の者が引き受けとの話であり、バイト代も出ると聞いた秋人は喜んで引き受けることにした。

翌日、一人暮らしをしている都市部の駅から、ローカル線を乗り継いで地元へ向かつた。

最寄の駅を降り、少し寂れた町並みを抜け、パンタグラフのない線路沿いを歩き、坂道をのぼる。

久しぶりの故郷を記憶と見比べながら帰つた結果、実家に着いたのは夕方前くらいになつていた。

玄関のチャイムを押して、挨拶を考えながら叔父夫婦の出迎えを待つ。

電話では、叔父達の旅行の出発は明日になると聞いていた。

「うむ、よく来た。入つてよいぞ」

しばらくすると、鍵が開けられる音とともにドアの向こうから声がかけられる。

聞き覚えのない声だった。はて、叔父の家族にこんな口調の人なんていただろうか。

「お邪魔します」

疑問を浮かべつつも仕事関係の人かもしないと思い直し、秋人は挨拶をしながら玄関の戸を開けて、正面を見た。

そして 秋人は言葉を失った。

「ふむ……これはあの性悪夫婦に一杯食わされたか」
正面からの声で、秋人は我にかえった。

落ち着け。状況を把握して冷静に対処だ。活路はある、たぶん。とりあえず正面の猫っぽいものは無視することにする。

「失礼します！ 今日伺う予定だつた秋人です！」

「なるほど、これが”するー”というやつか……。ちなみに残念だが家には他に誰もおらんぞ？」

さりげなく冷静に挨拶してみたが、ツッコミだけで奥から返事はなかつた。

実はただの聞き間違いだったという可能性は、すぐさま潰される。だが、まだ奥の手はある。

秋人は、がばっと勢いよく額に手の平を当てた。

「顔色はすこぶる良いぞ。風邪の心配はないじゃらつ」
体調はわりと完璧であった。

実は高熱による幻聴という可能性も、即座に潰される。

秋人は、正面に座つての猫を恐る恐る見なおした。

……やむをえまい、認めよう。どうやらこの猫は喋るらしい。

必死に無駄な逃避をしていた秋人を尻目に、猫はかぶりを振つて

話しかけた。

「やれやれ、こうなつてしまつては致し方があるまい……まあ少し落ち着け」

猫が静かに語り掛ける。

「この状況に混乱しているのはわかる。聞きたいこともあるじゃう。じゃが、立ち話もなんではないかの」

言われてみれば、確かに玄関の戸を開けてから秋人はずっと立ち尽くしていた。

「続きは居間で話すとしようかの。お茶とお菓子もあるぞ。ただし“せるふ”、じゃがな」

綺麗な白毛に覆われた体躯を翻し、猫は奥の居間へと歩いていく。が、すつと立ち止まり、振り返ってまたこちらを見る。

「……ああ、もし帰るんじやつたら止めはせん。白毎夢と思つて忘れるのも良かろう。……わしとしては少々寂しいがの」

言い忘れたらしい言葉を伝えると、今度こそ猫は居間へと向かつていった。

秋人は、気がつかないうちに強張っていた肩の力を抜く。どうやら何かとんでもないものに巻き込まれたらしい。しかし、ここで帰るのもなんだかすつきりしなかった。

白猫の最後の言葉が、嫌に耳に残っていた。

思い悩むうちに、秋人は色々な意味で敬愛する今は亡き家族の言葉を思い出した。

『秋人よ、迷つたら進んでみる。悩むより得るもののは多いぞ。ただし危くない程度にな』

『あつくん。世の中なんて、意外となるようになるものなのよー』

……あなた方は本当に大物で、似たもの夫婦でしたね。

二人の教えを胸に、秋人はため息をついて家の奥へと向かった。

久しぶりに入った家は思つたとおり少し古びれていて、そして懐

かしかつた。

考えてみれば、実家をに帰るのは実に五年ぶりになる。

高校入学のために引っ越しして、入れ違いに叔父夫婦が入居することになつてから、一度も戻つていなかつた。

学生生活が色々とあって忙しかつたのもある。

ただ、あまり戻りたくなかつたというのも本音だつた。

幼少時をほぼ祖父母と過ごした身に、一人のいない家は寂しすぎたのだ。

ふと、足を止めてまわりを見渡す。

柱の傷、壁の汚れ、天井の模様。

背が伸びたこと、落書きしたこと、お化けが怖かつたこと。目に入る、輝ける昔のかけら。

……いや、やめよつ。まずは今どうするかを考えなくては。

頭を振つて秋人は感傷を振り払い、思考を切り替えた。

少し考えた結果、気分を落ち着かせるために言われたとおりお茶を用意することにした。

記憶を頼りに台所に向かい戸棚を調べると、確かに市販の茶葉が収納されている。

そして隣には煮干の袋。

……さて、どうしたものか。

秋人は、自分のお茶を淹れつつ、煮干も小皿にいれて持つていくことにした。

準備を終えて居間に向かうと、猫は座布団にちよこんと座つていた。

少し小広く造られた空間は、縁側からの田差しが差し込んでいて明るい。

「ふむ、来てくれたんじやの」

卓を挟んで向かいに座り、運んできた小皿を差し出す。

「こままではすつきりしませんのでね……よかつたら、どうぞ」

「おお、気が利くのう」

猫は煮干を器用に口にくわえると、おこしゃつて囁き始めた。

秋人も、持ってきたお茶を啜る。少し苦い。

しばし平和な時が流れる。黄昏までの幕間。あるいは嵐の前の静けさ。

沈黙を破ったのは猫であった。

「さて。一息入れたところで、まずは簡単な自己紹介でもするかの」「併まいを直して、猫が言葉を続ける。

「わしの名は小春こはるといふ。あー、有体に言えばいわゆる猫又ねこまたじゃ。ほらよく言われるじゃらり、長く家に居ついた猫が化けるとこうあれじゃよ。まあ実際はちょっと違つんじゃが。ちなみに雌めじゃぞ」

「猫……又……」

妖怪ときたか。なるほど、それならば言葉を発してもおかしくはないかもしねれない。

まあ会話が成立してくるのだから、急に取つて食われるよくなことにせならぬだろ？

秋人は事態を把握するため、できるだけこの状況を受け入れることにした。

改めて小春を観察してみる。

体長は40㌢ほどで、比較的小柄な印象を受けた。

長い尻尾が特徴的だった。どうも一股には分かれていないようだ。きっと猫としては美人さんなのだろう……たぶん。

総合的な判断としては、やはりただの猫にしか見えなかつた。言葉を話す以外は。

「その、そんなに熱く見つめられると照れるんじゃが

「ああ、ごめんなさい。そんなつもりじゃ

「冗談じゃ

「どうも、なかなかに愉快な性格らしい。

「それで、小春さんはどうしてこの家に？」

「小春でかまわんぞ。話し方も畏まなくて良い。実はな、おぬしをここに呼んだのは他でもないわしなのじや

「」

「じゃあ小春。叔父さん達は小春のことは知つて？」

「そうじや。わしはてつきりおぬしに話をしてるものだと思つておつたのじやが……」

……どうやら説明をすっぽかされたらしい。恐らく面倒だつたのだろう。

そういうえば、叔父夫婦は物臭すぎると親父が愚痴つていたのを聞いたことがあつた。

まあ確かに、何も知らないものに対して猫又を紹介するのは難儀だとは思うが……。

「とすると、僕をここに呼んだ理由は？」

「うむ……。率直に言うと、助太刀を頼みたいのじや

「……具体的な内容は？」

小春は、真剣な目で訴えた。

「広義でいえば、鬼退治じや」

「その、また随分とメルヘンチックな……」

桃太郎にでもなれとでも言われるのだろうか。

「まあ待て、あくまで抽象的な表現じやからね。最後まで聞いてほしい」

「……わかつた。ごめん」

困惑していたのが顔に出ていたらし。

「実はな秋人、おぬしに手助けしてもらつたまには、仔細を話す前に説明しなければならないことがあるのじや」

どうやら複雑な事情があるようである。

秋人は小春の次の言葉を待つた。

「ただし、これを聞くと恐らく後戻りができる。そしてその理由も説明が難しい」

更には今後の日常生活に支障が出る可能性があるよつだ。

ああ、つまりこれは。

「じゃが、今ならまだ引き返せる。本来はわしと会つたこともいかんのかもしれんが、まあ夢だとでも思えば何とかなるじやろ」

最後の猶予といつやつなのだろう。

今ならまだ無かったことにして戻れますよ、といつりといつり。

「当初はその覚悟をもつて持つてここに来たのじゅと思つておったが、先ほどの様子を見るに恐らく何も聞いておりんよひじゅしどのとおりだつた。

小春を見て思考が固まるくらいには、何も知らなかつたのだから。「わしとしてはここに残つてほしいのが本心じゅ。じゅが、決断はおぬしがしなければなるまい」

小春が、穏やかな目でじりじりを見る。

「故に今一度ここで訊ねよう。おぬしは、世界に踏み込む意思があるかえ？」

2 困惑

ふいに蘇る昔の記憶。

物心つく頃から、秋人のほとんどの時間は祖父母とともにあつた。研究職についた両親はほとんど家に帰ることがなく、必然的に祖父母に面倒を見られていたからだ。

生活の中で一人に教えられたことは、思えばあまり一般的ではなかつた。

それは例えば武術であつたり、学問であつたり、家事一般であつたり。

あるいは変な人生観であつたり、妙な処世術であつたり、尻の敷き方敷かれ方であつたり。

正直どうかと思うものもあつたが、しかし今となつてはどれ一つ無駄になつてゐるものはない。

今年の秋人の礎は、あの”じいちゃんとばいちゃん変わつた一人”的のおかげであることは、疑いようもなかつた。

更に溢れる記憶の海が、奔流となつて一つの場面を描く。

浮かぶ光景は、祖父母二人に改まつて呼び出されたときのこと。
大事な話 確か一人はそう言つていたような気がするが、あまり鮮明には思い出せない。

『いいか、秋人。いつかこの先、お前に特別な助けを求めてく……が現れ……』

『もしかしたら……かもしれないし、かわいい……かもしれない……ねー』

『こりや、話の腰を折るな。……わしは、お前を強引に……へ縛りたくはない。普通の生活こそ幸せなはずじゃ。……じゃが、もしも世界の巡り合わせでお前にその役割が回つてきたのなら』

『大丈夫。きっとあつくんには才能がが眠つてるわ。だって、私たちの孫だもの』

『おまえが選んでくれるなり、できれば、あの子を助けてやって欲しい』

『もしかしたら、すいへんに付か合になるかもしないわよー、うふふ』

『……おまえは本当にその類の話が好きじゃな。あの子は……じゃぞ、そこまで……』

『ありここじやな……』……は関係……考えが古……』

『ええい、話は終わりじゃ。さてすまんが、この記憶は本当に

その時が来る……眠……』

『あらあら、あっくん。長くなつて」ぬ……せー……ちよつといつちを向……あとでお菓子……』

祖母の顔を見たといひで、初めて見る記憶のフワツシユバックは幕を下ろした。

「

小春の視線を受けて、秋人は思考を今に戻した。

少しの間、思いふけつてたようだ。

「質問なんだけど

思い切つて小春に問いかけた。

「僕の祖父　善次郎のことは知つてる?」

「うむ。善次郎には大変に世話になつた。それこそ言葉では語りつぐせないくらいの」

「そつか……」

さつきのは、もしかしたら　いやたぶんきっと、そういうこと

なんだろ?」

「よくわからないけど、それは小春のためになるんだね」

「無論じや。ひいては世界のためになるともいえるじやねん」
なかなかどうして、スケールは大きいらしい。

「分かった。引き受けけるよ」

小春の田が、僅かに揺れる。

「本当にいか？ わしとしては助かるが、先程も言つたとおり後戻りは……」

「構わなこよ。 それに、どうやらこいつのまにか既に頼まれてたことみたいだし」

「…………承知した。すまんが、どうかよろしく頼む」

小春が頭を下げる。

「気にしないで。さつとそれは、本来最初からつりの仕事なんだろうから」

「…………知つておったのか」

「いや、なんとなくそう思えただけだよ 記憶のことは黙つておくことにした。

「あーそれでの、実はその、もう一つ、頼まれてほしこことがあるんじやが」

「ん？」

小春を見ると、なんだか田が泳いでおり、動転してくるようだった。

はて、何かほかにも問題でもあつたのだろうか。

「いやなし、仕事を依頼する以上、報酬が、その必要じやうひと思ひのじやが

「なんだ、そんなことを気にしてたのか。大丈夫、他に当りがあるから」

有償は難しいといふことだらう。

そもそもこれが何かしらの如用家の仕事であるのならば、それを小春に請求するのはたぶんお門違いなのだ。

ただ単に、叔父にあとでゆづくへり話をすればいいだけであるもちろん増額請求を含めて。

「まあそういうわけにも、いかぬじやうひ」

なんだろう、さつきから小春の歯切れが悪い。

「そこでその、質問があるのじやが」

小春が何か思いつめているようこちらを見て言った。

「あ、秋人、おぬしに契りを交わした相手はあるかえ？」

「……は？」

一瞬、小春が何を言っているのか分からなかつた。
意味を理解したあと、今度は困惑した。

「いや、いなideど……」

「そ、そうか。なら問題は……」

口籠る小春。

秋人にも女友達はいたが、深い関係になつたことは一度もなかつた。

色々と事情はあるが、要はなかなか価値観が合わなかつたのである、たぶん。

それにしても、なぜ今そんなことを聞くのか。

どうしたものか困惑していると、再び小春がこちらを見る。
「では、ほ、報酬に……報酬に……」

言いかけて、しかしまたすぐに下を向く。

「……くつ……存外に恥ず……話が違……」

なにやら呟いていたが、ほとんど聞こえない。

すると、急に小春が何かを決心したような瞳でこちらを見つめてきた。

その口が言葉を発する。

「秋人よ！ 報酬として、わしを伴侶にしてよいぞー！」

「……は？」

本日一度田の硬直だった。

またもや思考が追いつくまでに時間がかかった。

伴侶？ 今伴侶って言わなかつたか？

いやいや、まさかまさか。話が飛びすぎている。

「ちょっと待つて。どうこうこと？」

「……は？」

「やじのやじになつてやるのやじ。」
「い、言つたとおりじや。せひ仕事の報酬として、わしがおぬしの伴侶になつてやるのやじ。」

聞き間違いではなかつたらしい。なんだか頭が痛くなつてきた。

「……ちょっと落ち着いつか。むしろ僕も落ち着いつ。言つてる意味は分かつてゐる？」

「つがいになり、食事を作ったり、洗濯をしたり、添い寝したり…すればいいのじやろ？」

いや確かに間違つてはいなが。なんだろ、どひこも所帶じみてるような気がする。

おやかとせ思ひが。

「もう一回訊くけど、本当に意味分かってる？」再び聞く。さわやか。

すると、ぼそっと小春が白状した。

「そう言えど、君子に教わったのじゃ……」

やはり元凶はあなたか迷惑祖母!?

古くか! てなおニシ、一をじかにてくらとは……恐れい

将来はまで気が向けてくれるのはありかたしか
とを考えてほしかった。

しかし弱つた。

のだ。

「いや、お断りしなくてはならない。」

「気持ちはありがたいけれど、流石に猫と付き合つのは

にやあああああ、しまった！ そういえば、必ず変化してから会

突然小春はそう叫ぶと、慌てて立ち上がり卓から少し離れた。

「秋人！ しばし待つのじや！ そして今まで記憶をちょっと保留

「おじいちゃんの手

「いや、そんな無茶苦茶な……」

何かミスがあつたらしい。

小春が目を閉じて、瞑想し始める。

「 存在干涉。対象は自身。置換対象は記憶事象を参照。事後修正として感覚一致を優先。 〔ネクト〕接続！」

突如、田の前の空間が歪んだ気がした。

あるいは、それは世界の一部だつたのかもしない。

いづれ今までに経験のない感覚なので、上手く表現できない。体は揺れていないのに、頭の中でぐらぐらしている感覚が渦を巻く。耐えられず、思わず目を閉じた。

恐らく、小春が何かを行つたのだろう。

あまり深く考えていなかつたが、彼女は猫又なのだ。何が起きてもおかしくはない。

少しすると、ようやく意識がはつきりしてきた。

目を開ける。

「 よし、成功じゃの」

今日は、何度硬直すればいいのだろうか。

田の前に見知らぬ少女が立つていた。

突然のことに頭が働かず、ただ少女を凝視してしまつ。

肩下まで流れ落ちている艶やかな銀髪、あどけない瞳、薄紅色の唇、幼くも整つた顔立ち。

身長は140cmくらいだろうが、10代前半くらいの印象を受ける。いわゆる小と中の境田程度。

主觀だが、遠田でもはつと田を引くくらいの可愛らしさがあつた。

少し付け加えるならば、控えめに言つても、起伏のあまり見られない体つきだつた。

更に付け加えるならば、なぜか何も服を着ていなかつた。

「 小春……なのか……？」

「 そうじや。これなら釣り合いが取れるじゃねつへ。」
手を腰に当て、小春が澄まし顔で言つ。
色々と見え過ぎだつた。

ようやく思考力が戻ってきた秋人は、急いで後ろを向いた。少し顔が熱い。

まさか人に変化できるなんて……これが妖術といつやつなのだろうか。

「とりあえず、まず服を着てくれと助かるかな……」

「ん？ にやあああああああ……！」

絶叫する小春。

どうも、さつきの格好は意図したものではなかつたらしい。

「み、み、見たかえ？」

嘘は付けないが、正直に言つのは憚られる。

結局のところ黙することになつてしまつたが、世には便利で残酷な言葉があつた。沈黙は肯定であると。

「つう……なんたる失態……」

小春はとりあえず近くにあつたバスタオルか何かを羽織つているようだつた、音から察するにだが。

「不可抗力とはいえ、その、ごめん」

故意ではなかつたが、とりあえず謝ることにした。

猫又だつて、きっと女の子なのだ。

「こつちこそすまんのじや。この程度で取り乱してしまつて」

背後から聞こえてきた声は、少し元気がないように思えた。

「……そうじやよの。伴侶となる以上、全てをさらけ出す覚悟くらいは必要なのじや」

だが次に聞こえてきた口調は、なにやら決意を固めたものだつた。なにやら雲行きが怪しい。

「あのー、小春……？」

恐る恐る背後に声をかける。

「ばさつ」という、なにやらタオルの落ちる音が聞こえた。

「さあ秋人よ。貧相で申し訳ないが、ぞ、存分に堪能するがよい！」

問い。このヒートアップしている小春を、どうすればやりす

「……」

「……」

答え。まずは友達から始めようと伝えて宥め、服を着るよう懇願する。

うん、これしかないだろう。紳士たるもの、流されではいけない。
そう思いプランを実行しようとすると。
しかし、このあと秋人は思い知るのだった。
この世はいつだって理不尽なのだと。

「小春さん。すみません遅くなりましたですー」

突然、居間の戸が開いた。

顔を向ける。見知らぬ少女が立っていた。

全く気がつかなかつた。小春とのやり取りに気がとられ過した。

二〇四

面識のない男と、あられもない姿の少女。

ハ、無事でもあるし騒騒しかたない

「アーティスト」

すぐさま怒声が響き渡った。

3 誤解

「「めん、これには事情が」」

秋人は説明を試みるが、途中で咄嗟に体を後ろへ反らした。強烈な勢いで、体すれすれを脚が薙ぐ。

少女からの、切れのいい回し蹴りだった。

どうにも臨戦体勢である。簡単に説得は出来そうにない。「避けるなです！ 变態さんめ！」

案の定、きつちり誤解されていた。

じりじりと間合いを詰めてくる少女。

背格好から年齢は小春より少し年上くらいにしか見えないが、動きは手練であった。

そして、なぜか巫女装束である。

あれでよく体捌きが出来るものだと感心する。

……さて、ところでどう切り抜けたものか。

事態打開の手段を考えるが、残念ながら少女は時間を与えてはくれなかつた。

「やつ！」

踏み込みから縦拳が放たれる。

拳動は素直だが、少ない動作で行われるそれは、素早く鋭い。右腕で弾きつつ防御するが、衝撃が腕に響く。

続く左下段蹴り。

威力を相殺せるため、こちらの足を防ぐよつと並んで弾き、反動で間合いを取る。

「……やりますですね」

攻撃を防がれた少女が、キッとこちらを睨む。

「 ちょっと本気を出しますです」

対面に立つ少女が、大きく息を吐く。

瞬間。

先程よりも更に鋭く踏み込みをかけてきた。

迫る攻撃は、左から右への手刀による払い打ち。

防御するか否か。

いや、これは。

秋人は、最終的に回避を選択した。

ただし出来るだけ体勢を崩さないように、最低限の動きで。

重心を下げ、計算した距離だけ後退する。

狙い通りにぎりぎりを掠めるだけで当たらない手刀。

そして、”本命”の左掌を構えていた右手でタイミングよく捌いた。

「ひやつ」

勢いを流されて、少女が体勢を崩す。

防御か大きく回避をしていれば、詰められて左の強烈な一撃が見舞われていただろう。

初段の踏み込みが、思ったよりに浅いことに気がつかなければ危なかった。

さて、崩してしまえばこちらの手番である。
素早く弾いた少女の左腕を左手で引き寄せて、足を払いつつ右手で更に後ろに流すように畳に押し倒す。

そのまま左手を捻り上げつつ、背中から押さえ込んで組み敷く。
これにて捕縛完了。

捕縛？

「……ああ。またやってしまった」

うな垂れる。

どうにか落ち着かせられないか考えていてもかかわらず、結局この有様である。

祖父に叩き込まれた体術は、攻勢的行動に対し体が勝手に一連の動きをする程度には染みこんでいた。

押さえこまれていてる少女が、下から涙ぐんだ声を上げる。

「わ、私も毒牙にかけるつもりですか。でもたぶんきっと全然面白

くないですよ。胸もペッたんこですしそう。あーでも小春さんがいなら自分も圈内ですか……いやです——やめるですよ——！」
「うな垂れている場合ではなかつた。

「このままでは完全に悪者である。

「ごめん！ すぐに離すよ！」

秋人はすぐさま少女を解放して、その場で謝った。

「ふえ？」

なんだかよくわからないといつような声をだす少女。
「えつと、変態さんじや、ないですか？」

顔を上げてわいぱりと言ひ。

「断じて違います」

「そうじやぞ沙希。そやつは押し入りではない」

小春も言葉を揃えてフォローする。

「うやらやつとのことで事情を察したりしこ少女が、顔を赤くして謝りはじめた。

「本当にごめんなさいです！ 私また早とちりしてしまつて……」
しかし言いかけてた途中で、あれつと首を傾げる。

「でもじやあ、なんで小春さんはあんな格好だつたですか？」

小春を伺うと、なにやら決まりの悪そうな顔をしていた。

「つむ……実は、ちょっと付属形成に失敗しての」

「うう、小春さん……しつかりしてくださいですよ……」

よく見ると、小春はいつの間にか服を身につけていた。

着ているのは淡い桜色を基調とした和服だった。

表面の薄い花弁柄の刺繡が可憐さを添え、その姿は無垢な幼さと共に幻想性を備えていた。

視線に気がついた小春が、こちらを向いて答える。

「この服か？ おぬしらがすつたもんだしているうちに、形成しなおしたんじやよ」

「随分と便利なんだね。これも妖術みたいなものなの？」

「あはは。確かに小春さんが使えれば、妖術つてことになるんですか

ねー？」

「どうやら少女は、小春のこととは詳しく知っているようだつた。

「ところで」

ふいに少女が、何かを思い出したといづよづな表情で「ちりを見
る。

「」お兄さんは、どちら様ですか？」

とりあえず私とお兄さんで自己紹介しませんか。

そんな少女の要望により、居間で自己紹介がはじまつた。
確かに、素性も名前が分からぬまでは互いに困つてしまつ。
「まあ、わしは今更名乗ることもあるまい。沙希は粗方知つてお
るじやろうし、秋人にはあとで別に話をするでな」

小春を省略することになり、年長者といふことでもう秋人から話
さなければならぬ。

少女へ顔を向ける。自己紹介……自己紹介か……。

「名前は如月秋人。大学生で工学部に所属。年齢は、十八歳。ここ
には色々あってアルバイトに来ました。趣味は……最近だとアナロ
グゲームですかね」

「……固いのう」

小春のじとつとした視線が痛い。

正直なところ、自己紹介とかアピールとかは苦手なのだ。

「あはは、お兄さんて変わつてますね。そういうえば何か修練でもさ
れてらつしやるんですか？ ムキムキじゃないのにとても強くて、
さつきはびっくりしましたです」

少女が笑う。正直、どこに笑つポイントがあつたのか分からぬ。
それにもムキムキとはなんともアレな表現だ。

まあでも、確かにそう思われるのも仕方が無いのかも知れない。
自分の体格を思い浮かべてみた。

身長約170cmの中肉中背、いたつて普通の体型である。間違

いなく、ムキムキではない。

ちなみに、顔も普通だと思つてゐる 当者比だが。

一部の知人の客観的評価によると、良い人には見えるらしい。そして華やかさが欠片もないとも。

余計なお世話である。

「幼い頃、祖父に古武術みたいなものを教わつてね。さつきは本当に『じめん』

「いえいいんですよ、あれはそもそも私が悪かつたんですね」

「そうじやぞ。沙希は落ち着きが足りんのじや」

「……確かに、そもそもは小春が原因じゃなかつたか?」

「あはは。えーと、お兄さんはこの家の家人なんですね?」

「まあ、そんなどころかな。今は叔父達が住んでるけど、昔はここに住んでいたんだ」

なるほど、と少女が何かを考えるように頷く。

ところで、さつきの発言に一つ気になる点があるわけだが……。

「その、お兄さんて呼び方は、他に変えられないかな?」

実のところちょっとこそばゆい。

それに、これでは名前を教えた意味がない気がする。

「 実は私には兄がいたのですが、私が物心つくまえに亡くなってしまつて……。お兄ちゃんて、いつかそう呼んでみたかったんですけど」

「 どうも地雷だつたらしい。失敗した。

慌てて言葉を探す。

「『じめん、変なこと聞い』

「 つていう話だつたら面白いと思いませんですか?」

「 ひとつと疲れた。

「 ……もう好きに呼んでいいよ」

「 本当にですか! やつたです!」

「 良かったのう、沙希」

反論する気力を失い、なし崩し的に認めてしまった。

まあ、喜んでくれるなら諦めるとしようか……。

「では、次は私の番ですね」

少女はコホンと咳払いをして姿勢を正した。

「私は神流沙希かんな さきって言います。お姉ちゃんと被るので、沙希って呼んでください。今回は小春さんに頼まれて、お姉ちゃんの代理として手伝いにやってきましたです」

どうやら彼女 神流沙希も小春から依頼を受けていたらしい、代理のようだが。

「ちなみに職業は今年から高校生にジョブチェンジしましたです今は夏休み中ですけど。趣味は、読書……ですかね、あはは」なんだか少し困ったような笑いを浮かべている沙希。

高校生……？

秋人は、お茶を啜りながら改めてそつとさり気なく沙希をじっくり眺めた。

少し長く伸ばされたおさげ髪と、くりっとした目が笑顔に映える。ふわふわしているという表現が似合つその雰囲気は、なんだか見ているとおっとりとしてくる

かわいいのは間違いないのだが、問題があるとすればそれは、どう見ても高校生には見えないことがある。

中学生 いや、頑張れば小学生でも通じるのではないだろうか。着ている巫女装束が妙に板についていて、和服姿の小春と合わせるとなんだか現実離れした空間になっていた。

「ちなみに、お兄さんとは遠縁に当たるらしいですよ」

「そうだったんだ。もしかしたら、前に会ったことがあるのかもしれないね」

確かに大きな親戚付き合いは数度あったが、残念ながら秋人には全く覚えがなかつた。

そういった集まりが苦手だったのも、原因の一つかもしれない。

……一瞬、沙希が少し悲しそうな顔をしたように見えたが、多分
氣のせいだ。

話を進めるその口調に変化はなかつた。

「接続系は存在干渉と空間干渉です。お姉ちゃんほどではないですが、封印式なら任せてくださいです」

今は果たしてどういう意味だったのか。

恐らく、自分の知らない業界の用語が満載だつた氣がする。

悩んでいると、怪訝そうな顔をしているのがが氣づかれたらしく
沙希が首を傾げる。

「どうかしましたですか。あ、お姉ちゃんじゃないから封印式に不安なんですね……。すみません、お姉ちゃんは別件でどうしてもこられなかつたので……」

「それは知つておるよ。あつちのほうが大問題じやから。人数を割くのは当然のことじや」

「でもでも、お姉ちゃんほど万能ではありますんが、お仕事はきちんとやりますですよ！　そういうえば、お兄さんはどうじつ接続系なんですか？」

沙希からの突然の振りにどうしていいものか困つてしまつ。

そもそも事情が全く分かつていないので。

「沙希さん……でいいのかな。悪いんだけど、正直などいひつけつきから何の話をしているかわからんのだ……」

「沙希、でいいですよ。……とにかく、もしかしてまさかまだ誓約のりしていないんですか？」

「……その説明をする前に、おぬしが乱入してきたから」

「あわわわ……私、なんか色々喋つちゃいましたですよ……」

急に慌て始める沙希。対して、平然としている小春。

「わしの変化も見られておるし、もはや今更じやらつ。秋人にも承諾は得ておるしの」

「……なるほど。それならいいんですけど」

秋人は頷いた。

「では秋人よ、少々長くなるので覚悟せい。沙希は退屈かもしれないが、お茶でも飲んで寛いでおれ。装束まで準備していたところを悪いが、今日はもうしない予定じゃ」

「いえいえー、暇ですしせつかくですかから私も聞かせてもらいますです。お茶は頂きますけど」

「さてと、どこから話したもののかの……」

「いりして、小春の長い話が始まった。

「この世界は、遙か昔から他の世界の侵攻に晒されていた。
敵対する、こちらとは次元の異なる世界。

通称『あちら側』^{アナザ}。

かの世界より次元を渡り「こちらへ現れた異形の者達。

通称『鬼』^{デーモン}。

彼らは動物に、人間に、そして世界に干渉し、害をなし、その生
を齎かした。
しかしこの世界とて、それを黙つて傍観しているわけではなかつ
た。

地球。この星の上に存在するこの世界を統べるもの。

地球上には、この世界を存続させる義務が、そして意思があつた。
遍く生物は、地球による庇護を受けた。

意識への直接干渉、認識阻害による自己防衛。

無意識下で鬼を認識させないようにすることにより、逆に相手か
らの干渉をもほぼ退ける鉄壁を張り巡らせたのだ。

多くの生きとし生けるものは、完全ではないものの再び生を謳歌
し始めた。

だがこれは”認識しない”という積極的な対応が可能であるから
こそ行える防御であり、万能ではなかつた。

彼らは次に無機的なもの、即ち自然に対して干渉しはじめた。

その結果、洪水、噴火、竜巻、地震 多くの自然災害が引き起
こされた。

災害にあつたもの達は祈つた。天に、神に、そして地球に。

地球は決心し、感受性が高く適性のあつたものに接触し、その意
思を告げ庇護を解いた。

どうか、ともにこの世界を守つてほしいと。

庇護を解かれるということは、鬼を認識するということ。

鬼を認識できるところは、即ち鬼に干渉し排除できるところ。
」と。

「ついで、この世界の命あるものの長い戦いが始まった。

……小春の時代がかつた話をものすごく要約すると、こんな感じ
だった。

正直、長すぎて一度は聞きたくないレベルである。

ただまあ、裏の歴史についてある程度のことは把握できた。

要するに世界では、人知れず侵略者との戦いが繰り広げられているらしい。

更にその戦いには、意思を持つ地球が参戦しているようだ。

……にわかには信じがたい話ではあるが、小春が嘘をついている
とも思えなかつたので恐らく真実なのだろう。

「”認識していない”ということを知った時点で、星の庇護はずつ
と弱まってしまうのじや」

小春が後戻りできないと言つたのは、それが理由だった。

同時にこの事実が世に知れ渡らないのも、”認識していない”こ
とが原因だった。

いわば、地球による大規模情報隠蔽工作である。

「質問なんだけど」

一つ、疑問があつた。

「庇護なんて手段を取らなければならぬほど、その鬼っていうの
は太刀打ちできない存在なの？」

人間とて、ただ駆逐されるだけの存在ではないはずだ。

しかし、結果として人は世界から守られている。

仮に当時は技術が未熟だったためだったとしても、現代でも変わ
らないのはどういうことなのか。

生き残るために殲滅することが目的ならば、数を揃えるほうが有
効であり、且つ被害も少ない。

例えば今からでも全人類の庇護を解き、総力をもつて抵抗したほうが効果的なはずである。

もつとも情報の錯綜による混乱は避けられないだろうし、世の根底が崩れ去る可能性はあるが。

「いくつかの問題がありますが、大きな理由は次の二点だと言われてますです」

退屈だったのか、沙希が横から口を挟んで答えた。

「まず一つ。多くの人がそのことを知ってしまうこと自体に問題があるですよ」

「鬼による干渉を放置すれば、やがて世界は崩壊するといわれておる。じゃが、そもそも鬼という存在そのものがこの世界への干渉になつとるんじやよ」

なるほど、ままならない。

存在そのものが世界にとつて害であれば、その存在を認識・観測すること事態が危険を招く可能性を孕んでしまう。

少数ならそれも許容範囲のようだが、恐らく全人類となつては保障できかねるのだろう。

「なんとなく理解したよ。それで一点目は？」

沙希に問いかけてみる。

「鬼には、この世界には存在しなかつた技術 例えるなら、御伽噺の魔法のようなものが使えるですよ」

「奴らは、因果律に干渉しこの世界の摂理を捻じ曲げることができるので。わしらはこの技術を、”干渉術”と呼んでおる」

「具体的に言うと、例えば飛んできた銃弾を不可視の壁で弾いたり、何もないところに炎を出したりしますです」

世界の裏側は、思っていたよりもファンタジーだったらしい。

しかし、真面目に考えてみれば相当厄介なことだ。

「当初の戦いは、それは悲惨なものだったみたいですね。ヨハカルに言つとぼつこぼこだったとか」

確かにそうだろう。

一方だけが圧倒的な兵器を持っている状態で、まともな戦いになるわけがない。

「そこで地球と人は考えたのじゃ。毒を制すには、毒をもつしかないのではなかろうかと」

「詳細は謎なのですが、恐らく紆余曲折を経て、私たちは地球とうバイパスを通すことにより干渉術行使することを可能にしました。ただしそれは、適性のある人に限られてたわけですが」

「地球と心を通わせ、庇護から脱することを誓約」と言い、これを行つた者を守り手と慣用的に呼んでおるのじゃが……実のところ守り手の数はあまり多くないのが現状じゃ」

「なんとなく話が見えてきた。

「つまり、小春は僕に守り手になることを要求してゐるわけだね」

小春が申し訳なさそうな苦笑を浮かべる。

「忌憚なく言えればそのとおりじゃ。……最も、今となつてはあまり選択肢はないんじゃがの」

さつきの話からすれば、既に庇護は解けかかっている状態なのだ。よく分かつていなが、察するに色々と危険なのだろう。

「そもそも、もしかしたら適性がないかもしれないよ?」

「いや、恐らくそれはあるまい。理由は不明じやが、適性は多くの場合にその遺伝性を發揮しておる。如月家であるおぬしなら大丈夫じゃろう」

「やつぱり、うちはもともと”そういう家系”だったんだね」

「秋人よ。家族に、特に善次郎達に悪気はないのだ。あやつらはおぬしに」

「大丈夫」

「そう、なんとなくわかっているのだ。

おかげで、今まで概ね普通の生活を送ることが出来たのだから。

「話を進めよう。守り手になるにはどうすればいいんだっけ?」

「努めて軽そうに。そしてお茶を一口。

何も悩むことはないのだ。

祖父父母の願いならば、それは叶えざるを得ないのだから。

「まずは誓約ですね。ほんとを”認識”した今なら、あまり難しく考えることはないですよ」

さも簡単そうに沙希が言ってくる。

「気を落ち着けて、世界を感じて、心で語りかけて、祈るだけいいです。世界平和のため、そんな感じですかねー」

「沙希の言うとおりじゃ。まあやつてみればわかるじゃろつて」

小春も気楽そ�である。

落ち着かないが、言われたとおりやつてみると何がいい。

「わかった。やつてみるよ」

秋人は、大きく息を吸つて吐いた。

目を閉じ、心を落ち着ける。

浮かぶ心象風景は、空。蒼く澄み渡る、大空。

『なあ秋人よ。この見渡す限りの青空に比べれば、わしらなんて本当にちつぽけなもんじやないか』

いつだつたか、あるいはいつもだつたかもしけないが、そうやって祖父は秋人を諭し、慰めていた。

世界にとって、自分一人などというものは大した影響がないのだ

という自覚。

そしてだからこそ、そのうえで自身が何を為せるかが大事なのだ

という信念。

秋人にとって世界の象徴とは、果てのない蒼穹であった。

秋人は世界へと問い合わせる。

自分に何かできることはあるのか。それは、誰かのためになるのか。

すると突如、風景に白い光が満ち、どこからか感情が伝わってき

た。

それはまるで雑音ノイズのように感じられた。

純然たる言葉としては表現されておらず、しかしそれぞれに意図がある。

あえて一つの意思として表すのであれば、”世界を守つてほしい”、”そういう感じであった。”

圧倒的な存在感を自分の内側から感じるという不思議な感覚。秋人が初めて触れた”世界”だった。

その状態が数秒続いた。あるいは一瞬だったのかもしれない。体感のため不明な時間が経過した後、心に広がった光は突如として弾けた。

それと同時に、パリンというガラスの割れるような音が周囲に鳴り響く。

恐る恐る目を開ける。目の前には小春と沙希、一人が座っていた。さつきと部屋の景色は何も変わっていない。

にもかかわらず、何かが違うように感じられる。

空気が、肌寒い。

「お疲れ様です。どうでしたか？」

「……うん。何か白い光がどばつときて、何かす」このものに出会って、何かガラスみたいなものが割れた気がした」

「なんともな言い方じやが、まああなたがち間違いでもないかの。とりあえずは成功じや、「苦労じやつた」

ほつとした様子の一人。

「ただ、なにかこう、寒くないけど寒い感じがするんだ」

普段とは違う状態について秋人は問いかけた。

何かまざい予兆なのではないか、そんな思いがあつたのだ。

「それはきっと世界の庇護が解けたからですねー。おめでとうお兄さん、これでお兄さんも立派な守り手の一員になりましたです」

「感覚についてはそのうち慣れるじやうから、今はあまり気にしないで良いぞ」

どうやらどうこうものらしい。

あまり実感は湧いていなかつたが 残暑が消えつつある実りの季節の初旬、こうして秋人は守り手となつた。

4 秘密（後書き）

気がつくと改稿している。
そしてプロットが変わる。
難しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1518v/>

その二人、危険につき

2011年10月28日20時14分発行